

歴史に学ぶ

大阪経済大学特別招聘教授・
経済評論家

岡田 晃

第四十八回 昭和恐慌を乗り切った高橋是清は「転職の達人」だった

片面だけ印刷の二百円札発行
大胆策で「金融恐慌」乗り切る

「本日、東京渡辺銀行が破綻いたしました」——一九二七年（昭和二年）三月十四日、衆議院予算委員会で片岡直温蔵相なおほろがこう発言した。同行は以前から資金繰りに窮していたものの、実はこの時点ではまだ破綻していなかった。だが蔵相発言によって、預金を引き出そうとする大勢の人が押しかけ、同行は休業に追い込まれた。

当時は多くの中小金融機関の経営が悪化していたことから取り付け騒ぎは全国に広がり、わずか三カ月の間に三十以上の中小銀行が休業・破綻する事態となった。昭和金融恐慌である。

時の若槻礼次郎内閣はこの危機対応で行き詰まり、同年四月に総辞職、代わって田中義一内閣が発足した。この時に蔵相に就任したのが高橋是清だ。大正時代に二度の蔵相、そして首相も務めた高橋はすでに政界を引退していたが、未曾有の危

機乗り切りのため引つ張り出されたのだった。

高橋は蔵相に就任すると直ちにモラトリアム（支払い猶予令）を発した。給料や少額預金（一日五百円以下など）の支払いを除き、銀行の金銭債務支払いを三週間猶予する内容で、銀行からの資金流出を防ぎ信用不安を抑える目的だった。

また預金支払いに備えて急ぎよ二百円札の発行に踏み切った。だが時間がなかったため片面だけの印刷で、裏は真っ白という異例の紙幣だった。高橋はこれを店頭に積み上げるよう銀行に指示し、預金者に安心感を与えた。

常識を超えた大胆な緊急策が功を奏し、取り付け騒ぎは三カ月足らずで収まった。金融恐慌の鎮静化を見届けた高橋は同年六月に蔵相を辞任した。

財政出動、金融緩和、円安で デフレ不況「昭和恐慌」から脱出

だが危機はこれで終わらなかった。二年後の一九二九年十月、ニューヨークの株価大暴落をきつ

かけに世界中が大恐慌に見舞われ、日本も「昭和恐慌」と呼ばれる深刻なデフレ不況に陥ったのである。一九三二年十二月、高橋は犬養毅首相に請われ、四度目の蔵相に就任した。

今度は緊急措置だけでは乗り切れない。デフレ不況から脱して経済を立て直す必要がある。そこで同年から翌年にかけて、①緊縮財政から積極財政への転換（公共事業と農村復興などを柱とする時局匡救事業ときぶききうじぎやうで景気回復を図る）、②その財源として増税は行わず、国債発行を増やし日銀が引き受ける、③金融緩和（市中金利の引き下げと通貨供給拡大）④金輸出再禁止による事実上の円安誘導——などを打ち出した。

このうち①は、今ではよく知られるケインズ主義的な考え方で、「高橋財政はケインズの影響を受けた」と言われることがある。だがケインズが理論を発表したのは、高橋の政策から四年後のことだ。高橋がケインズ経済学を先取りしていたのだ。さらに言えば、財政出動、金融緩和、円安に

よってデフレ脱却と景気回復を図るといのは、リフレーション政策の先駆けだ。

高橋の政策はすぐに効果を表した。輸出のV字回復や失業率の改善などで、一九三三年には景気回復が顕著となった。欧米先進各国が世界大恐慌に苦しむ中で、いち早く不況から脱出したのだ。

波乱の人生、米国では奴隷に日本を救った「転職の達人」

高橋がなぜそのような先進的的確な政策をとることができたのだろうか。そこには、彼のそれまでの波乱の人生が影響しているように思う。

幕末の一八五四年、幕府御用絵師の非嫡子として生まれ、間もなく仙台藩足軽の高橋家の養子となる。十三歳の時、横浜で英国銀行支配人のボー

イとなり、翌年には米国に留学することになった。

ところが出発前、横浜の米国人商人に学費や渡航費を着服され、米国ではホームステイ先の主人に騙されて奴隷にされてしまう。しかも他の家に転売を繰り返されるといふ苦難を味わった。

一八六八年、日本の明治維新を知った高橋は、苦勞の末に帰国を果たした。だが仕事は、森有礼（後の初代文部大臣）の玄関番から、英語学校教師、翻訳業、大蔵省、文部省、農商務省などを転々とした。その間、銀相場に手を出して仲買商を開業するも多額の損失をこうむったり、日本橋の芸者置屋の居候など放蕩生活を送ったりもした。

そんな高橋だったが、三十四歳で特許局長に就任、ようやく役人生活が定まったかに見えた。だがそれから間もなく、ペルーの銀山開発話が持ち上がる。もともと高橋とは無関係だったが、銀山経営の全権代表となるよう関係者から強く要請され、やむなく不本意ながら官を辞してペルーに赴いた。ところが行ってみると、銀山はすでに廃坑となっていたことが判明する。事業は失敗に終わった。

ほとんど騙されたようなものだったが、帰国した高橋は責任を取り、家屋敷を売って後始末に充てた。裏長屋に引っ越しを余儀なくされ、三十七歳にして無一文の失業者となったのだ。

そんな高橋には同情が集まった。彼の能力を見込んだ日銀総裁・川田小一郎が声をかけてくれ、日銀に就職することができた。ここから高橋は順調にキャリアを重ねていくことになる。日銀では副総裁を経て、総裁に就任。その後は政界に転じ

大活躍したことは前述のとおりである。

このような高橋の人生について作家の小島直記は「転職の回数、その社会的通念の振幅の度合いにおいて、日本人としてはトップに立っている」と評している（『高橋は清自伝』中公文庫版の「解説」）。いわば「転職の達人」だ。

そうした経験を通じて、危機に対応し乗り越える力、強い意志、社会のすみずみに至る実情把握と的確な判断力などを身につけていったのだろう。これらは、今日の企業経営でも必要な要素だ。「社会の実情把握」という点は、消費者ニーズや市場動向の把握ということになるだろう。

さてその後だが、一九三四年、岡田啓介内閣で六度目の蔵相に就任した高橋は、緊縮財政に転じた。景気は回復した以上、さらなる財政拡大は悪性インフレの危険があると考えたからだ。

その一環として、膨張した軍事費を抑えようとした。だが軍部は激しく反発。ついに一九三六年、高橋は青年将校率いる反乱部隊に襲撃され射殺された。二・二六事件だ。享年八十三。

これ以降、日本が戦争への道をつつたことは周知のとおりだ。だが、もし高橋がその後も健在であったなら、昭和の歴史は少しは違っていたかもしれないと思うと返す返すも残念である。

岡田 晃

（おかだ あきら）

一九七一年、慶応義塾大学経済学部卒業後、日本経済新聞社入社。編集委員を経て、テレビ東京出向。「ワールドビジネスサテライト（WBS）」マーケットキャスター、同プロデューサー、NY支局長、テレビ東京アメリカ社長、理事・解説委員長。二〇〇六年から大阪経済大学客員教授。二〇二二年、同特別招聘教授。新刊『徳川幕府の経済政策——その光と影』（PHP新書）。

